保健所におけるHIV検査・相談利用者を支援する保健師の専門能力の育成

総務局人事課　中西鮎美
健康福祉局地域ケア・高齢者支援課　山下十喜
健康福祉局健康対策課　服多美佐子
広島大学大学院医系科学研究科　中谷久恵

Ⅰ　緒言

HIV検査･相談利用者の支援では,機会を捉え受検者の心配していることを解決に導き,予防行動を働きかけていくことが重要であり，受検者の反応を見ながら受検者に合わせた相談援助技術が求められる。厚生労働省エイズ動向員会によると，広島県における平成30年のHIV検査件数は1,885件であり，HIV相談件数が3,826件と，最も多かった平成20年と比較すると全国の傾向と同様にいずれも半減している。一方で，HIV 検査・相談件数の減少は保健師らがHIV検査・相談業務を経験する機会が少なくなっていることも示している。

HIV検査・相談利用者が抱えている不安が軽減し，検査・相談後には予防行動がとれるようになる効果的な事業実施及び質の確保・向上のためには，従事する保健師らに対し，職場外研修（Off-JT）や職場内研修（OJT）による支援を行い，相談援助技術の専門能力の継続的な習得のため積極的に教育し，保健師の専門能力をブラッシュアップする必要がある。

そこで，本研究では広島県の保健所で HIV 検査・相談利用者を支援する保健師へのOJT の現状と課題を明らかにすることを目的とし， HIV 検査・相談援助技術に必要な能力とその育成のあり方を探ることとする。

Ⅱ　研究方法

１．研究対象とデータの収集

広島県の保健所 HIV 検査・相談業務を担当するプリセプター保健師７名へのフォーカス・グループインタビューを計画し，平成30年１月に参加が可能であった対象者に対してインタビューを実施した。調査のインタビュー内容は，１）OJTの実際と課題，２）HIV検査・相談業務を行う保健師へOJTを行う際に所属や所属外からあればよい支援，３）自身が，保健師として HIV 検査・相談業務に従事する時に大切にしていること，とした。

２．分析方法

インタビューを録音して逐語録を作成した。分析方法は HIV 検査・相談利用者を支援する保健師の現状業務での実際と課題から,OJTを行う際にあるとよい支援と保健師として大切にしていることに関して語られている箇所を抽出した。抽出したデータから意味内容を読み取り，類似性と相違性を比較検討しながらカテゴリー化した。抽出に際し，共同研究者とともに内容の妥当性を確認した。

３．倫理的配慮

研究者の所属局及び保健所 HIV 検査・相談業務の担当課長会議において調査の承認を得た。対象者には文書と口頭で研究の趣旨や研究への参加は自由意思であること，

参加の可否による不利益は一切ないこと，得られたデータは研究以外に使用しないこと，データは匿名化し，個人を特定できないようにした上で公表することを説明した。その上で同意書への署名が得られた後，インタビューを開始した。

Ⅲ　結果

調査対象者７名のうち同意した者が６名で，このうち参加が可能であった４名が参加した（表１）。インタビュー時間は１時間 30 分であった。

調査内容から得られたカテゴリーは５カテゴリーあり，これらは２つの OJT に関連する内容と HIV 検査・相談を行う際に保健師として大切にしていることにまとめられた。以下に，カテゴリーを＜　＞，サブカテゴリーを【　】，コードを[ ]によって結果を述べる。

表１　研究対象者の背景

対　象　者	A	B	C	D
経験区分	中堅後期	中堅前期	中堅後期	新任期

経験区分:中堅後期:16～25 年　中堅前期:6～15 年　新任期:5 年以内

１．OJT の実際と課題

OJT の実際として，＜HIV の基本的な援助技術の獲得＞のカテゴリーが得られた。新任期の保健師が初めて HIV 検査相談業務の担当を行う場合には，[まずはプリセプターがやっていることを横で見せ，次に一緒に行う]というように基本的な説明や指導が行われ，次に［徐々にステップアップし，一人で問診や検査など一通りの流れを行う］といった【段階に応じた指導技術の獲得】が進むように指導されていた。【採血技術の習得】においては，[感覚をつかむため，人体での練習を行う］や［血管が見にくい同僚や男性同僚などを相手に，複数回，採血練習する］などの指導を行われていた一方で，[採血の練習に必要な物品の確保に苦労している］という苦労も語られた。次のステップとして，[電話予約・相談の受け方や問診の取り方を所内で何度もロールプレイする］や［結果通知の仕方を所内でロールプレイする］といった実際の検査・相談を想定した指導が行われていた。また，技術の獲得をしていく上で，[幅広く HIV/AIDS の知識を知っておくことが自信につながる］ことや［採血と検査業務などの技術研修を複数回受ける］必要があること，[受検者や検査結果に応じた様々な保健指導パターンを学ぶ］必要があるため【HIV/AIDS に特化した研修の必要性】が課題として語られた（表２）。

表２　OJT の実際と課題

＜カテゴリー＞	【サブカテゴリー】	［コード］
HIV の基本的な援助技術の獲得	段階に応じた指導技術の獲得	電話や対面での相談の基本的な指導から始める
		まずはプリセプターがやっていることを横で見せ，次に一緒に行う
		徐々にステップアップし，一人で問診や検査など一通りの流れを行う
	採血技術の習得	感覚をつかむため，人体での練習を行う
		血管が見にくい同僚や男性同僚などを相手に，複数回，採血練習する
		採血の練習に必要な物品の確保に苦労している
	ロールプレイの実施	電話予約・相談の受け方や問診の取り方を所内で何度もロールプレイする
		結果通知の仕方を所内でロールプレイする
	HIV/AIDS に特化した研修の必要性	幅広く HIV/AIDS の知識を知っておくことが自信につながる
		採血と検査業務などの技術研修を複数回受ける
		受検者や検査結果に応じた様々な保健指導パターンを学ぶ

２．OJT を行う際にあるとよい支援

OJT を行う際にあるとよい支援として，＜職場全体で行う OJT＞があげられ，［サポート体制があると他の保健師と一緒に考えながら保健指導ができ，内容も充実する］［人材育成のフォローをする所属課長や保健師人材育成担当リーダーに，指導内容を報告する］ということが語られ，【プリセプター任せにしない指導】を求めていた。

また，［プリセプター自身十分な経験がないので，悩みながら指導している］，［新人と一緒に，受検者対応し，考え，学んでいく姿勢をとっている］ということも語られ【プリセプターは悩みながら指導している】現状があった（表３）。

表３　OJT を行う際にあるとよい支援

＜カテゴリー＞	【サブカテゴリー】	［コード］
職場全体で行う OJT	プリセプター任せにしない指導	サポート体制があると他の保健師と一緒に考えながら保健指導ができ，内容も充実する
		人材育成のフォローをする所属課長や保健師人材育成担当リーダーに，指導内容を報告する
	プリセプターは悩みながら指導している	プリセプター自身十分な経験がないので，悩みながら指導している
		新人と一緒に，受検者対応し，考え，学んでいく姿勢をとっている

３．HIV 検査・相談を行う際に保健師として大切にしていること

＜専門的な知識の習得＞として，【HIV/AIDS 治療，社会制度の知識の習得】があげられ「治療や薬剤について学ぶ」［自立支援医療や障害者手帳などの社会制度について学ぶ］といった知識の習得の大切にしていた。さらに［匿名検査，相談の役割を果たすため，被検者のプライバシーを保護する］ことが大切であると語られ【プライバシー保護の重要性】もあげられた。また，［相談者の問診時の反応で結果通知時の対応を変える］などの【受検者に合わせた指導の大切さ】や【正確なＨＩＶ検査と結果説明】，［不安になった出来事をどうすれば繰り返さないかを受検者と一緒に考える］ことや［予防行動につながる目標を受検者と一緒に考える］といった【行動変容を促す保健指導】が行われており，相談の場面では＜予防行動につながる保健指導＞も大切にされていた。さらに，＜リフレクション・話し合いの重要性＞として，［気になる事例は所内の保健師と一緒に対応する］や［問診内容を複数の保健師で共有し，受検者にどのような指導が必要かを話し合う］などの【受検者対応に対する振り返り】が所属において行われており，経験が少ない保健師が検査・相談をする場合は，［現場で見てサポートし，違っていること，気づいたことを随時伝える］ことで【指導内容を振り返り，話し合いながら方向性を考える】という対応も大切にされていた（表４）。

表４　HIV 検査・相談を行う際に保健師として大切にしていること

＜カテゴリー＞	【サブカテゴリー】	［コード］
専門的な知識の習得	HIV/AIDS 治療，社会制度の知識の習得	治療や薬剤について学ぶ
		陽性者治療の勉強のため医療機関を訪問する
		自立支援医療や障害者手帳などの社会制度について学ぶ
	プライバシー保護の重要性	匿名検査，相談の役割を果たすため，被検者のプライバシーを保護する
		プライバシー保護のため時間管理を行う
予防行動につながる保健指導	受検者に合わせた指導の大切さ	受検者に合わせて相談しながら対応する
		相談者の問診時の反応で結果通知時の対応を変える
	正確な HIV 検査と結果説明	正確に検査をして結果を伝える
	行動変容を促す保健指導	陰性結果の通知場面を大切にする
		不安になった出来事をどうすれば繰り返さないかを受検者と一緒に考える
		予防行動につながる目標を受検者と一緒に考える
リフレクション・話し合いの重要性	受検者対応に対する振り返り	受検者へどういった保健指導がよいか助言を受ける
		気になる事例は所内の保健師と一緒に対応する
		問診内容を複数の保健師で共有し，受検者にどのような指導が必要かを話し合う
	指導内容を振り返り，話し合いながら方向性を考える	現場で見てサポートし，違っていること，気づいたことを随時伝える
		到達目標等の達成に向け何ができるか話し合い，方向性を考える

Ⅳ　考察

１．HIV 検査・相談利用者を支援する保健師に必要な能力

OJT の実際として【段階に応じた指導技術の獲得】や【採血技術の習得】などといった＜HIV の基本的な援助技術の獲得＞は基本的な能力と言え,業務を遂行する上で獲得しておくことが欠かせないものである。また保健師らは HIV 検査・相談の＜専門的な知識の習得＞を大切にしており，これは HIV 検査・相談利用者へ責任を持って説明し不安を解決に導くためには必要な能力である。

そして，保健師らは＜予防行動につながる保健指導＞を行うことを大切していることが分かった。保健所等における HIV 即日検査のガイドラインでは，HIV 検査は HIV 感染予防，ケア，治療，支援の入り口として不可欠なものである[1)]と述べている。保健所保健師はこの中でも特に，受検者自らが予防的な行動をとることができるよう支援することが求められており，その支援の視点は HIV 検査・相談利用者とかかわる，電話予約，検査前の問診面接，採血，検査後の結果通知面接のどの場面においても必要となる相談の核になるものである。

さらに，予防的な介入を行うことは，HIV 検査・相談のみならず相談援助における保健師の専門的な技術であり獲得していかなければならない専門能力と考える。採血技術，HIV に関する専門知識に加え，対象者一人ひとりの生活に焦点をあて，相手を大切にし，寄り添った支援をしていくといった保健師としてのマインドも積み重ね備えていく必要がある。

２．利用者を支援する保健師に必要な能力の育成のあり方

＜予防行動につながる保健指導＞を行うためには，まずは基本的な技術と知識である＜HIV の基本的な援助技術の獲得＞や＜専門的な知識の習得＞を備えておく必要がある。インタビューの内容から日々の実践においてプリセプターらが指導していることが分かったが，育成にあたってはプリセプターだけでなく，組織全体でそれぞれの役割を生かし連携した支援が必要である。まず，職場においては OJT として日々の実践の中で個人の特性や経験してきた業務に合わせて【段階に応じた指導技術の獲得】を行う。事業主管課では,【HIV/AIDS に特化した研修の必要性】や【HIV/AIDS 治療，社会制度の知識の習得】が必要とされていることから，集合研修を企画し，人事異動により HIV 検査・相談業務の経験がない保健師が業務を担当することも考慮し年度初め早期に開催することが望ましい。なお，担当保健師の基礎看護技術の経験が乏しい場合は，職場での採血技術の練習が必要となるが,［採血の練習に必要な物品の確保に苦労している］現状が語られたことから，事業主管課等で物品の一括購入や配付を行い，より技術の獲得をしやすい環境を整える必要がある。そして，保健師は専門職として，OJT や研修からの習得だけでなく，自己研鑽によっても技術や知識を習得し続けることが求められており，技術や知識を積み重ねていくことは HIV 検査・相談利用者への相談に応じる際の質の向上及び，保健師自身の自信にもつながる。さらに保健師を統括する部門においては日々の OJT が円滑に進むよう育成のための体制づくりや保健師としての基本的な対人援助技術の習得に向けた支援が欠かせない。

また，育成のため段階的な OJT を進めている一方で，［プリセプター自身も十分な

経験がない中で悩みながら指導や対応をしている]現状が明らかになった。事業主管課による Off-JT や保健師統括部門による体制づくりに加え，プリセプター以外の同僚保健師や上司が一体となった＜職場全体で行う OJT＞もまた重要である。厚生労働省は，保健師の実践能力は，実践を通して自らの体験を適切にフィードバックされることで習得できる[2)]としており，HIV 検査・相談においても実践や研修を積み重ねるとともにプリセプターだけでなく同僚保健師や上司などによる助言や技術的支援といった＜職場全体で行う OJT＞を意識的に行うことでその実践が適切にフィードバックされ実践能力が向上していくと考える。

さらに，松村らは，新任保健師と熟練保健師の対話リフレクションの意味について，新任期保健師にとっては自己の課題の明確化や実践での自己成長につながり，先輩保健師にとっても専門家としての成長につながる意味がある[3)]と述べており，職場において繰り返し行うことで，新任期保健師と共に先輩保健師も専門職として成長していき，より質の高い HIV 検査・相談技術の提供につながっていくことが期待される。このことから，保健師の能力の向上のためには職場全体での＜リフレクション・話し合いの重要性＞を意識し＜職場全体で行う OJT＞が欠かせないと考えられる。またリフレクションや話し合いは，HIV/AIDS に特化した技術だけでなく保健師としてのマインドを獲得するために重要であり，後輩保健師は先輩保健師らの支援技術や貴重な経験から学びとる努力をし，先輩保健師らは意識的に自らの経験から得た技術を継承していくことが大切である。

すなわち，職場だけでなく組織全体の連携した支援を受けながら，職場でのリフレクションを繰り返し，HIV 検査・相談の保健指導の実践を積み重ねていくことは，保健師の HIV 検査・相談利用者を支援する能力である＜予防行動につながる保健指導＞という保健師の専門的な技術がブラッシュアップされ，予防的介入の能力を高めることにつながる。

Ⅵ　結語

HIV 検査・相談利用者を支援する保健師らの育成にあたっては，段階を踏んだ OJT が行われており，その各段階の適切な時期に集合研修だけでなく職場全体でのリフレクションが必要である。また，保健師は Off-JT や OJT の機会だけでなく自己研鑽し続ける必要もある。そして，HIV 検査・相談業務の能力を高めることは，保健師活動の本質である予防的な介入に必要な能力を高めることにもつながる。

引用文献

１）　HIV 検査受検勧奨に関する研究班．保健所等における HIV 即日検査のガイドライン．宮城，東北大学　東北メディカル・メガバンク機構，2019.

２）　厚生労働省．新人看護職員研修ガイドライン保健師編．2011.

３）　村松照美，渡辺勇弥．市町村保健師と熟練保健師の対話リフレクションの意味．山梨県立大学看護部紀要．10，2008，49-57.